

まつばその
松葉園遺跡

大野城市教育委員会



第1図



第2図

松葉園遺跡は、本市乙金一丁目にあります。遺跡のある付近は、乙金山から西に延びている低い丘陵地で、標高は24m程度です。

ここが遺跡であるとわかったのは、昭和54（1979）年のことで、今回もご紹介する石棺墓が見つかったためです。

本格的な発掘調査は平成9（1997）年と平成15（2003）年に実施され、いろいろなことがわかりました。

第1図は平成9年の調査の全体写真です。奥に見えるのが1号石棺墓、少しわかりにくいのですが手前に見えるのが3号石棺墓です。いずれももともとは蓋が

あったはずなのですが、この場所を畑として利用するときに壊されたものと思われます。時代は古墳時代後期、今から1400年ほど前のものです。この時の発掘調査では、このほかにも弥生時代中期（約2000年前）の土抗（大型の穴）や堅穴住居跡も見つかっています。

第2図は平成15年の調査の写真です。こちらでは古墳時代の堅穴住居跡や溝が見つかったほか、12世紀に中国で作られた焼き物（白磁）がまとまって出土しました。本市ではこのような例は少なく、大変貴重な成果となりました。



第3図

第3図は、第1図の1号石棺墓をアップにしたものです。これが昭和54年に見つかつて、当地が遺跡であることがわかりました。長さ約1m、幅約60cmの長方形をしています。中からは鉄刀子（小刀）と鉄鏃（矢尻）が出土しました。第4図は、その時に見つかった堅穴住居跡です。全体の4分の1程度しか残っていませんが、もともとは直径6mほどの円形をしていたのでしょ。う。深さは約40cmで、床面はほぼ平坦。中央部には炉の跡と思われる楕円形の土抗がありました。屋根を支えていた柱穴は、1つしか見つかりませんでした。



第4図



第5図

第5図は、第3図の石棺墓の図面をとっているところです。発掘調査では、このように主に図面と写真で記録を残します。写っている人と比べると、この石棺墓のだいたいの大きさがわかりいただけるでしょう。

第6図は、平成15年の発掘調査で見つかった堅穴住居跡です。この住居跡も全体の半分ほどしか残っていませんでしたが、もともとは4m×4m程度の正方形であったと思われます。深さは約30cmで、炉やカマドの跡は見つかりませんでした。中からは古墳時代の遺物が出土しました。第7図のほぼ中央で画面を上下に横断しているのが、長さ6.5m、幅1.2m、深さ90cmほどの溝の様子です。この溝の中から、12世紀に中国で焼かれた白磁が出土しました。だれがどうやってこの松葉園遺跡の地まで運んで来たのでしょうか。



第6図



第7図

第6図は、平成15年の発掘調査で見つかった堅穴住居跡です。この住居跡も全体の半分ほどしか残っていませんでしたが、もともとは4m×4m程度の正方形であったと思われます。深さは約30cmで、炉やカマドの跡は見つかりませんでした。中からは古墳時代の遺物が出土しました。第7図のほぼ中央で画面を上下に横断しているのが、長さ6.5m、幅1.2m、深さ90cmほどの溝の様子です。この溝の中から、12世紀に中国で焼かれた白磁が出土しました。だれがどうやってこの松葉園遺跡の地まで運んで来たのでしょうか。